

8306 冬は一日一日、おわりにちかづき・・・

冬は一日一日、おわりにちかづきつつあった。まもなく春がくるだろう。

ことしの冬はしのぎよかった、とおもう。全く冬はまいとしあたたかくなっていくようだ。地球は年ごとにあたたまっていく。あたたまりすぎて、おしまいにはどういうことになるんだろう。

窓のそとをながれる雪げしきにぼんやりと視線をむけながら、鯉沼淳はとりとめのないことを考えていた。

菊村 到『八人目の敵』

[許容訳例]

Winter was drawing closer to its end ay by day. Spring would come before long.

“It’s been mild this winter,” he thought. “Indeed, winter seems to be getting warmer every year. The earth is growing warmer with the years: I wonder what will become of it in the end when it gets too warm?”

Gazing idly at the snowy scene going by outside the train window, Jun Koinuma indulged in wandering speculations.

[翻訳例]

Day by day, winter was drawing nearer to its close. Spring would be here before long.

It had been a mild winter this year, he thought. It was almost as though the winters were getting warmer every year. The earth was warming up a little more each year: what would happen in the end when it got *too* warm?

Gazing idly at the snowy landscape slipping past outside the train window, Koinuma Jun let his thought run on unchecked.

■冬は一日一日、おわりにちかづきつつあった。(8306)

★「一日一日」は day by day ですが、これには注意すべき点があります。この phrase は、ほとんどの場合、何か動きがあて比較を表す言葉と一緒に使われます。たとえば、Day by day he grew a little fatter.とか、His English improved [got better] day by day.のように使います。ですから、ここでもそのような形で使う方がいいでしょう。

★「(冬は) おわりにちかづきつつあった」の「おわりにちかづく」は、draw to a close; draw near to its end [close]ですが、「ちかづきつつあった」ですから進行形で、day by day を使うなら、上で述べた通り比較にする必要があります。したがって、Winter was drawing to a close.は間違いではありませんが、英語としては不自然な感じになります。ここは Day by day, winter was drawing closer to its end[close]とするか、もう少し英語らしい表現にするのなら Day by day, winter was drawing nearer to its close となります。

■まもなく春がくるだろう。(8306)

★「まもなく」は before long が一番いいと思います。普通、before long は「やがて」に対応し、「まもなく」には soon を当てるのですが、ここでは、どちらも使えると思います。

★「春がくるだろう」は一見話者の推測、主観的な判断のように思えますが、実際にはあくまでも自然の現象としてとらえていると考えてよいと思います。ですから、be going to ではなく will を使って、直接話法で言うなら Spring will be here [come] before long. です。なお、こういう場合、習慣的に will come より will be here の方が英語として自然です。あるいは Soon it will be spring. とも言えます。ここでは be going to は使えないのは be going to…は、たとえば、He is going to buy it for me. と言ったら「彼はそれを私のために買うつもりだ」とか「彼に買ってもらうことになっている」という意味になります。つまり、主語の意志、あるいは話者の強い主観的な推量・判断を表すわけです。

◆日本語の話法と英語の話法

この日本文は、翻訳としては実に扱いにくい日本文です。「冬は一日一日、おわりにちかづきつつあった。」は事実の表現です。「まもなく春がくるだろう。」は頭の中で考えていることです。引用符を使って、頭の中のことを Direct Speech で書くなら“Spring will be here [come] before long.”ですが、地の文として書かれているので、英語で言う描出話法 (Represented Speech[Thought]) です。改行のあとの「ことしの冬はしのぎよかった」は「と思う」と続くのですが、これ以下も描出話法です。ということは、英語としては全てを過去時制（あるいは過去完了）で処理することと、代名詞や時の副詞をどうするか考えないといけなことになると思います。したがって、「まもなく春がくるだろう。」は引用符を使わないなら Spring will be here [come] before long. ではなく Spring would be here [come] before long. とすることになります。

■ことしの冬はしのぎよかった、とおもう。(8306)

★「ことしの冬」は、直接話法では this winter ですが、話法のルール通りにすると間接話法にするときには that winter にしなければなりません。ただ、原則はそうですが、this とか now とかは、発話の「時」が同じであるなら、そのままの形で使います。ルールにこだわってすべてを変えると、意味が曖昧になる場合があります。たとえば、ここで this winter を that winter にすると、その時点での冬なのか、もっと前にさかのぼった昔の冬なのかわからなくなってしまいます。ここでは、主観性を保つために this をそのまま残すわけですが、このことが Represented Speech の一つの特徴とも言えます。妥協というか完全に折衷した表現になるということです。ある程度主観性を保ちながら事実を述べるという微妙な面白さが出る表現法なのです。引用符を使って直接話法にすると、かえって堅い感じになるとと思います。

★「(この冬は)しのぎよかった」の「しのぎよい」は、文字通り英語にすると easy to bear[put up with]になるとは思いますが、その意味で mild はぴったりの言葉です。この部分を直接話法で書くと“It has been mild this winter.”ですが、引用符を外すと It had been mild this year.

となります。あるいは It had been a mild winter this year. でもかまいません。

★「とおもう」は直接話法で書くと “It has been mild this winter,” he thought. になりますが、引用符を付かないで、It had been mild this year, I thought. あるいは It had been a mild winter this year, I thought. と描出話法的にすることも出来ます。

■全く冬はまいとしあたたかくなっていくようだ。(8306)

★「全く」には indeed でも間違いではありませんが、ちょっと文学的で、特に、頭の中で考えていることを伝えるような文章には堅すぎる感じがします。「全く・・・のようだ」を Represented Speech にする場合は、たとえば、It was almost as though… という表現を使うか、もう少し colloquial な感じにするならば You'd almost think… という表現を使ってもいいと思います。この場合の You は、もちろん One の意味で、It almost one think that… という使い方になります。(Represented Speech は言葉(英語)に意識的に関わろうとした人でないと難しいと思います。)

★「冬」は、この場合、「まいとし」と続くので the winters と複数にしてもかまいません。

★「まいとし」は every year か、ここでは比較級を使うので year by year でもいいでしょう。ただし、day after day とか year after year はずっと継続していることを強調する言い方(e.g. Day after day I argued with him, but he refused to be convinced.) で、ここでは使えません。

★「あたたかくなっていく」は be getting warmer です。

★「・・・ようだ」は seem (to be getting warmer) という表現も使えます。

■地球は年ごとにあたたまっていく。(8306)

★「地球はあたたまっていく」は is growing warmer とか is warming up a little more などが使えます。なお、日本語の「あたたまっていく」という表現にはこれから続くという含みがありますから、ここを現在完了(has grown warmer…) とすることは出来ません。現在完了は「(過去に始まったことの)現在の状態」を述べるものです。現在完了進行形も、やはり「現在の状態」です。

★「年ごとに」は each year のほかに with the years (時[年]が経つにつれて)とか year by year を使うことが出来ます。『イディオム完全対訳辞典』(マケーレブ・岩垣共著・朝日出版社)には The weather seems to be warming year by year. (年ごとに気候が暖かくなっている)とか Year by year I watched the wrinkles in the mirror grow deeper. (年ごとに鏡に映るしわが深くなっていた)という例を載せています。

■あたたまりすぎて、おしまいにはどうということになるんだろう。(8306)

★「あたたまりすぎる」は it gets too warm です。ただ、これではちょっと弱い感じがするなら too をイタリックにするか、warm を hot に変えてもいいと思います。

● [て]

「あたたまりすぎ [て]」の [て] は微妙です。普通 [て] は接続助詞で「起き [て] 顔を洗う」のように「動作順次」を表しますが、ここでは [(あたたまるという経過をたどると)] という経過・因果関係が含まれていると思われます。英語では after を使いたい気分

になりますが、やはり「同時」で when でしょう。

★「おしまいには」は in the end です。

★「どういうことになるんだろう」は(I wonder) what will happen [will become of it]でしょう。なお, happen の代わりに occur を使っても間違いではありませんが, what will occur…とすると, 何か地球そのものがどうなるかという「起きる」という意味以外のニュアンスが入ってくる感じがします。それから I wonder は使っても使わなくてもほとんど同じです。なお, Represented Speech にすると will は would です。ついでながら, 「いったいどういうことに・・・」と強調するような積もりで I wonder whatever will…とすることはできません。whatever という言葉は, たとえば, Whatever will happen to him if he continues drinking like that?という場合のように, 何かショッキングなこととか, 大変なことを予想して「いったい・・・だろう」という意味で使うものです。I wonder という表現にはそういうニュアンスは全然なく, ただどうなるだろうと疑問に思うだけの感じで使う言葉だからです。

■窓のそとをながれる雪げしきにぼんやりと視線をむけながら, 鯉沼淳はとりとめのないことを考えていた。(8306)

★「窓のそと」は, 「ながれる雪げしき」で「車窓から外を眺めている」とわかるので, outside the train window とします。

★「ながれる」は go by でもかまいませんが, slip pastの方が日本語の「ながれる」に近くなると思います。

★「雪げしき」は the snowy scene(s)ですが, snowy とよく一緒に使われる言葉に landscape があります。the snowy landscape がいいと思います。なお, snowy の代わりに snow を使うと「雪でできた」という感じになってしまいます。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(窓のそとをながれる雪げしき)

「窓のそとをながれる雪げしき」は「連体修飾節(窓のそとをながれる)＋不定代名詞的体言(雪げしき)」ですから, 英語では「名詞(the snowy landscape)＋関係詞節(which are slipping past outside the train window)」ですが, 述語動詞が知覚動詞(視線をむけながら)なので which are を省いて「知覚動詞＋目的語(the snowy landscape)＋現在分詞(slipping past outside the train window)」の構造になります。

★「ぼんやりと」は idly (何もしないで) でしょう。absent-mindedly は「(他のことに夢中になって) ぼんやりと」ですし, vacantly は「(安心して) ぼんやりと」ですし, bemused は「(一度にいろいろ質問されて頭の中が混乱して) ぼうっとして」です。ここでは不適切です。

★「視線をむけ[ながら]」は gaze という「暫時動詞」を使うと分詞構文で[・・・ながら]を表すことが出来ます。したがって, ここは Gazing idly at the snowy landscape slipping past…となります。

●[ながら]と◆分詞構文の使い方

[ながら]には分詞構文や連結辞 as が使われますが, [ながら](二つの動作が並行して

いる) という意味で…ing (分詞構文) が使われるのは「暫時動詞」の場合です。「一回だけの動作を示す動詞」(瞬時動詞) で…ing を使うと「二つの動作が続く」(動作順次) ことになります。たとえば, Sitting in the chair, he said "I've come to say good-bye."は「椅子に座りながら」ではなく「椅子に座って, (そして)・・・」という意味になります。つまり, Seating himself opposite me, he said…と同じで, 二つの動作が続くということです。Gaze という動詞は「暫時動詞」ですから, Gazing out of the window, he said…は「外の景色を眺めながら・・・」ということで動作が並行しているわけです。

★「とりとめのないことを考えていた」は indulged in wandering speculations[rambling thoughts]とか let his thought run on unchecked とかです。なお, 「「とりとめのないこと」は「連体修飾節＋こと」ですから「名詞＋関係詞節」で対応するところですが, 英語の短縮法で wandering speculations[rambling thoughts]となったと考えていいと思います。